

さよなら ジュリアン

野村昇司・作／津田櫓冬・画



野村昇司

さよなら ジュリアン

さよなら ジュリアン

現代・創作児童文学10

1976年1月／発行

著者／野村昇司 1976 ©

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1506(代表)
振替／東京0-64678

印刷／三浦企画印刷
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本はおとりかえ致しますのでお求めの書店または本社へお申し出願います。

913 野村昇司

さよなら ジュリアン

金の星社 1976

205p 22cm(現代・創作児童文学10)

基本カード記載例

8393-042101-1406



はじめに

ソリー アイ ワズ ロング――

和也^{かずや}は叫^{きけ}んだ。

叫んでも、ジュリアンにはきこえない、

それでも、和也は叫んだ。

ソリー アイ ワズ ロング――

和也の声は、雨にけぶる赤松林の中で、
いつまでも響^{ひび}き渡っていた。

●ソリー アイ ワズ ロング
●Sorry I was wrong = ごめんなきいばくがわかった

目次

1 ようこそ、ジュリアン・7

1 特売日をねらえ・8

2 サルマタ君、登場か・20

3 ウエルカムジュリアン・29

4 先生、日本語が書けます・41

2 日曜日・49

1 風が、びやびやふきぬける・50

2 なにがサラリーマンじゃ・63

3 君、ひがむことなかれ・75

3 ジュリアン旋風・83

1 搜索隊^{そうさくたい}出動・84

2 かあちゃんでも話を通じる・95

3 先生、ちょっと待ってください・107

4 生きるってどんなこと・114



4 山登り・127

1 達治のバカヤロー・128

2 ユーゴー マウンティン・138

3 登れ、小田山・147

5 ソリー アイワズ ロング・163

1 ジュリアンに合わす顔がない・164

2 なんて いえば いいんだ・173

3 ことばをおぼえただけではだめなんだ・182

4 楽しかったよ、和也・189

5 ソリー アイワズ ロング・199

あとがき・204



野村昇司 (のむら しょうじ)

1933年，神奈川県に生まれる。横浜国立大学教育学部心理科を卒業。主な著書に『希望の漂流』『水のない海』『砲台に消えた子どもたち』『竹の三吉』等がある。

現住所—神奈川県横浜市鶴見区
市場東4の3

津田櫓冬 (つだ ろとう)

1939年，京都府に生まれる。東京芸術大学工芸科卒業。主なさし絵の作品に『ちいさなちいさな駅長さんの話』『ぼくはカンガルー』『おばけのおるぶる』等がある。

現住所—東京都調布市富士見町3-21
調布富士見町住宅1-502

現代・創作児童文学10

さよなら ジュリアン

野村昇司



小田城址の古木

1 ようこそ、
ジュリアン



土浦駅前

1 特売日をねらえ

茨城県のほぼ中央に、ゆるやかな稜線^{りょうせん}を四方にひろげた筑波山^{つくばさん}がある。

その山すその村々をむすぶ道路を、一台のバスが土浦^{つちうら}に向かって走っていた。かつては、バスの乗客がうっかりすると座席からほうり出されるようなガタガタ道だったが、今ではどこも舗装^{はそう}されて、バスは快適^{かいてき}に走っていた。

道路の両側のたんぼに植えられた芝生^{しばよ}が、ゆうべの雨にあらわれて、緑が目にしみる。ここ数年、あちこちのたんぼが、米の収入よりよい芝生の栽培^{さいばい}にきりかえられ、その芝生がはてしなく続いている。

バスは、赤松やクスギの低地林にさしかかった。濃い緑^この葉をひろげたこの低地林を、この地方では「ヤマ」と呼んでいた。季節のおりおりには、ワラビ摘み^つやキノコ狩り^がの人々でヤマは大変なにぎわいをみせるところだった。山すその村のあちこちに点在する緑のヤマは、平凡な村の風景に、のどかな美しさを描き^{えが}出していた。

けれど、今、そののどかな村々のど真ん中に筑波研究学園都市^{つくば}の建設がいそがれていた。

首都東京の人口は過密状態におちいつている。それをゆるめるために、昭和三十六年に官庁、研究機関の移転の構想が打ちだされた。昭和三十八年には、この筑波の山すその村々が研究学園都市の指定をうけたのだ。その後さまざまな問題をだきかかえながら、完成年度昭和五十二年を目標に南北十八キロ、東西六キロにおよぶ自然環境かんきようをそのままに生かした新都市の建設のため、日夜突貫とつがん工事が行なわれていた。

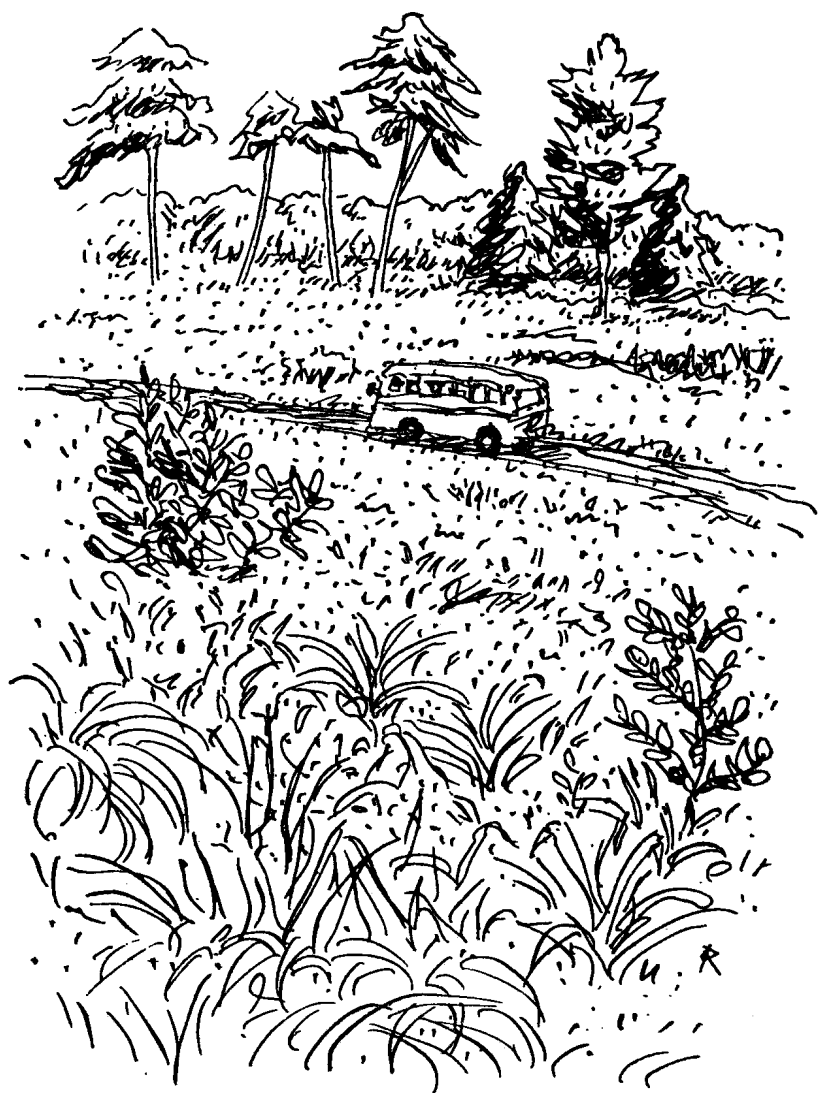
もうすでに、高エネルギー研究所、防災科学技術センター、宇宙開発センターなどの研究機関は活動をはじめ、筑波大学は昭和四十九年から第一期生の授業も開始されることになっていた。バスの窓から、ぼんやりと外の景色を眺ながめているだけでは、どこにそんな研究学園都市が建設されているのか感じることもできない。

けれど、建設の騒音そうおんのすべてをのみこんで静まりかえっている筑波の山すその村々も、やがて、その姿をかえようとしていることだけは確かだった。

バスは再び、芝生のつづく道路にさしかかった。

——うちも、現金収入の多い芝生しばふにきりかえれば、もっと生活が楽になるのになあ。

とうちゃんは、米の収入だけでは食えないといって取手とりでのカメラ工場につとめている。じいち



やんと、かあちゃん、そのほとんどのたんぼの米づくりをしている。いちばん大変なのはかあちゃんだ。

「かあちゃん、うちも来年は芝生にすっぺ。」

ふとった体を座席にせずめ、気持ちよさそうにねむりかけているかあちゃんに、和也は声をかけた。その声にかあちゃんは、

「えっ、もう土浦か」と、あわてて座席から立ちあがって、「まだ、中根だっぺ。」と、いった。

和也は、かあちゃんのスカートをひっぱった。乗り合わせていた近所のおばさんたちが笑った。和也ははずかしくて、窓の外へ目を向けた。

やがてバスは、桜川を渡って土浦の町中へはいった。バスの終点は、国鉄常盤線の土浦。駅前のターミナルは、車と人でごったがえしていた。

バスは止まった。乗客のほとんどが国鉄の駅にすいこまれた。買い物にでて来たおばさんたちの一団だけが、そそくさと町中へといそいでいった。

和也とかあちゃんは、人や車に遠慮でもするように肩をよせ合い、横断歩道を渡った。

土浦の名産、ワカサギやサクラエビを売る軒の低い店が、伸びたビルの谷間に押しつぶされていて、みじめに見えた。駅前のデパートは、高い窓から幾すじもの赤や黄色のたれまくをさげ、

大バーゲンセールを呼びかけている。

「よっていこうか。」

たれまくを見あげながら和也はかあちゃんを誘ってみた。かあちゃんは見向きもしなかった。駅前デパートは月賦販売の専門店で、高級品しか置いてない。かあちゃんの目的は町中のデパートだった。

かあちゃんの足は早い。和也は、ときどき走った。

町中のデパートが見えた。客引きのための特売品が白いワゴンに山積みされている。それを見ただけでかあちゃんは、うきうきするらしい。すぐとワゴンの品物に手をのばした。

店内は、明るい照明と飾りつけではなやんでいる。

エレベーターは満員だった。

「階段、階段。」かあちゃんは五階の特売場へいそいだ。そして五階のフロアーにたどりつく

「どうする。」と、かあちゃんはきいた。

「おれ、ここで待ってる。」

和也はいった。

「動くんじゃねえぞ。」

かあちゃんはハンドバックをだきかかえると、人ごみの中へ突進した。

かあちゃんが土浦のデパートへ来る時は、その朝の新聞に必ずどぎつい原色ずりの特売広告がはいつていた。けさも、その広告に顔をすりつけて動かなかった。そして、

「和、きょうは土曜日だ。昼からデパートへ行くぞ。」

と、学校へでかけようとしていた和也を誘った。和也の意志を聞くのではない。なかば命令である。

買った荷物を持ちながら、特売コーナーをかけまわるのは大変な労力がある。そればかりか、荷物を持って積み上げられた特売品をあさるようでは、あとで、

「こりゃ、もうけた買い物だった。」

という品物はさがせない。そこでかあちゃんは、荷物持ちの助手が必要だったのだ。

和也にしてみれば、かあちゃんの役にも立つし、それはまた、うちの経済をすこしでも助けることになると考えていた。

いや、そんなことより本音は、自分のほしいものが買ってもらえる魅力みりよくがあったのだ。だから五十分もバスにゆられても、かあちゃんの命令に従うふりをしていた。

最近では、かあちゃんの後ろについてまわることだけは、はずかしいので、階段のフロアで

待つことにしていた。

フロアーのベンチにすわった和也の腕うでの中には、もう五つも小さな包みが持ち込まれていた。そろそろ終わりだろうと思っていると、目の前に赤ン坊をおぶったおばさんが額ひたいに汗あせをにじませて、背中をゆすっていた。人ごみの熱気でつかれたのか、赤ン坊はぐずっていた。和也はベンチを立った。

「わるいわね——ありがとう。」

札をいわれ、ちょっぴりいい気分になって、フロアーの真ん中へすすんだ。そのとき階段をかけるのぼって来る外国の少年に、和也は気づかなかった。和也は、その少年にどんと押しのけられた。

「あっ。」

和也が声をあげた時、和也のかかえこんでいた包みが床の上に散らばった。外国の少年もかかえこんでいた包みを、和也の散らばった包みの中へほうりこんでしまった。

「ソリー。」

和也は、何をいわれたのかわからないが、とにかく、外国の少年といっしょに包みをひろいあげた。